

モニターの紙面評価

弊誌「みちくさ」の取材で鹿児島県の種子島と屋久島に滞在した。馬毛島問題にしても屋久島の入山制限にしても、本土に居ながら想像するものと現地で体感するものは異なることに気づいた。馬毛島については、米軍機訓練移転問題が浮上する以前から環境破壊が行われてきたことが分かった。こんなとき浮かぶのは「地球は誰のものか」という疑問だ。九州山地には古より人が入ってはいけない神



域があり、植物垂直分布と同じく人もまた住む場所が決まっていた。里山と奥山があり、奥山には立ち入らない。立ち入る時は神に祈り、得るものは足るを知り、感謝する。宮崎県西米良村にはカニコボーズという精霊がおり、その通り道は決して冒してはならないと信じ生きる人たちがいる。戦後、日本人の生き方が変わり、人中心になったといわれる。しかし、その一方で、人は自然の循環の一部であるという

被災地ルポ 視点に共感

地域交流誌みちくさ編集長 福永 栄子さん

古来からの日本人の価値観への敬意と誇りは、九州各地に現存する神事などに受け継がれてきたのだ。

東日本大震災の発生以来、被災地の復興や福島第1原発事故をめぐる数多くの記事を読んできた。その中で、共同通信社の配信記事ではなく、西日本新聞記者が実際に現地に赴いて九州の視点を注いで綴った現地ルポを特に興味深く読んだ。

記者の視点がいい。テレビ報道は視聴者に映像を見せ判断を委ねるが、新聞報道は選択した数葉の写真と限られた字数で表現するため、記者の視点が色濃く反映される。

4月2日付朝刊に「通信・津波の経験語り継ぐ」という被災地からのルポが掲載された。その中で、記者は岩手県陸前高田市に住む古老の詞を借り、経験が受け継がれていないこと、津波で被災するたびに海抜の低い地に再び新しい街が生まれてきたことを伝えていた。津波に遭った人は高台に移るが、代わりに安くなった地を求めて商業施設や工場が集まり、住宅も建っていく歴史を繰り返してきたことを無念そうに語っていた。記事の向こうに、悲惨な被災地を見て苦しむ記者の姿が見えた。(第27期西日本新聞モニター、宮崎市)